

シリーズ しまねの遺跡 発掘調査パンフレット12

森原下ノ原遺跡

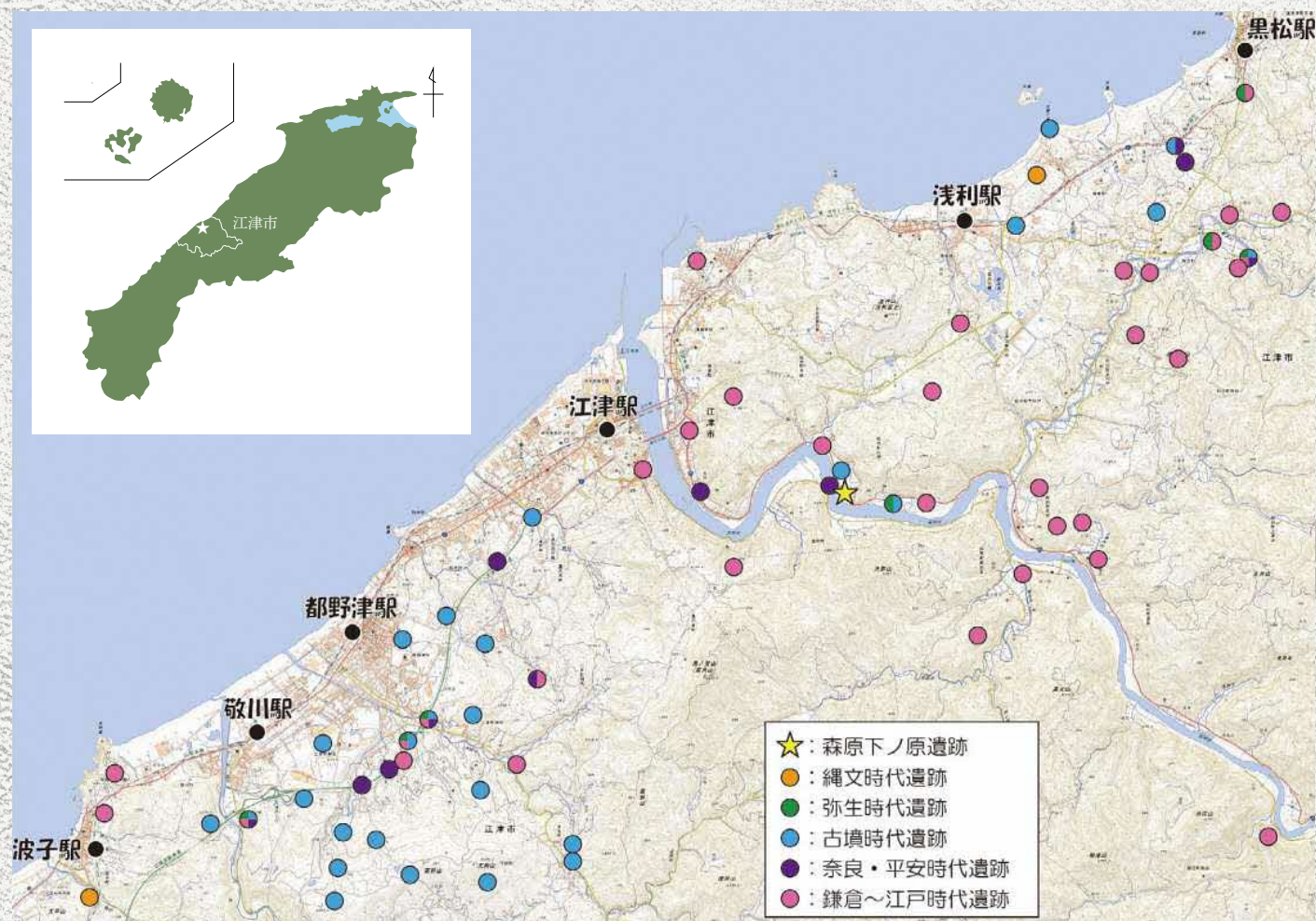
江の川下流の交通拠点



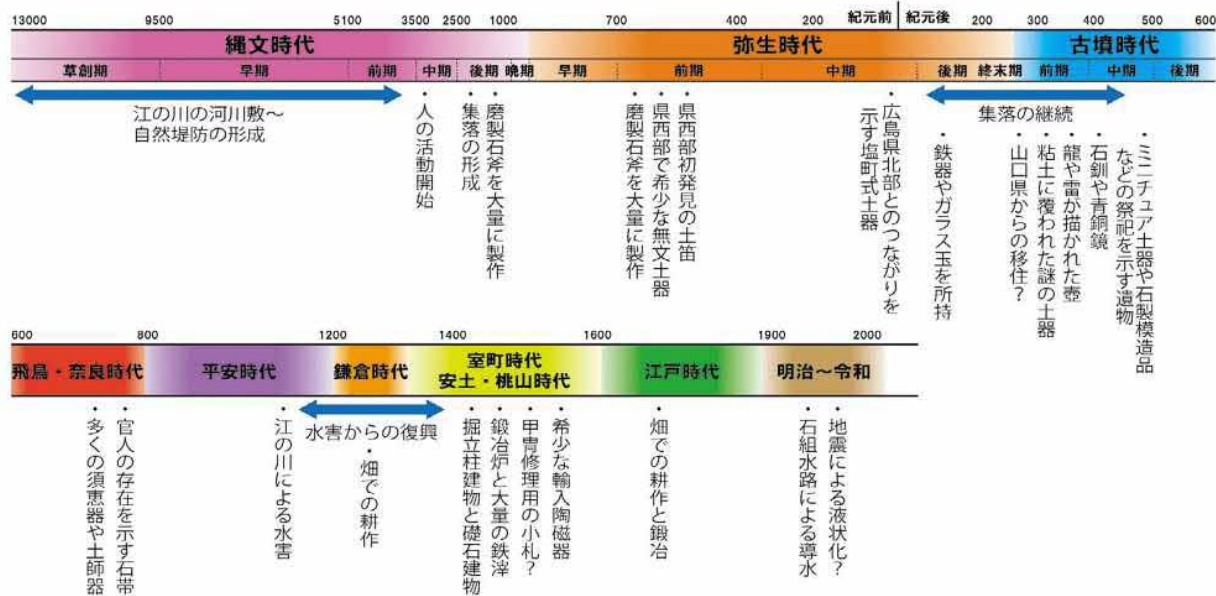
島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター

はじめに - 江の川河口とその周辺 -

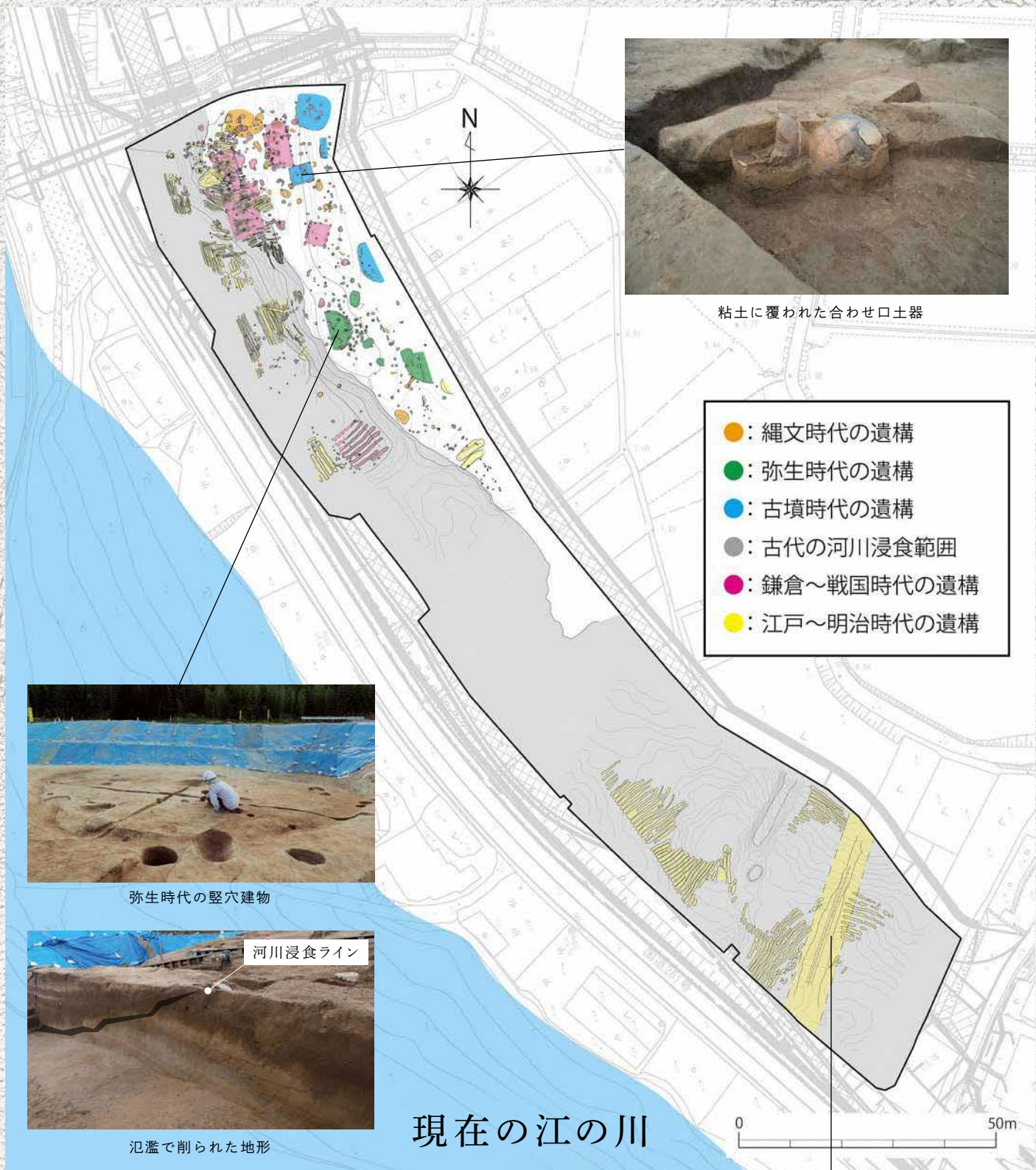
森原下ノ原遺跡は、島根県江津市松川町にあります。中国地方最大の河川である江の川の河口から約5km遡った東岸に位置し、周りを江の川と標高120mの急峻な山々に囲まれています。周辺は中世の山城が多く分布し、古い時代の遺跡は沿岸部を中心に広がっています。江の川沿岸はこれまで遺跡の調査が及んでいなかった場所ですが、ここに縄文時代から現代まで、5,000年以上にわたる人々の生活の痕跡が残されていたのです。



電子地形図25000(国土地理院)を加工して作成



1. 森原下ノ原遺跡のすべて



森原下ノ原遺跡は、度重なる江の川の氾濫によって大部分は破壊されていました。特に、平安時代頃の大規模な洪水は地形が大きく変わってしまうほどの威力だったと想像できます。

しかし、氾濫の被害を免れた部分では縄文時代から古墳時代までの生活の様子が良好に残っており、また洪水後も徐々に復興しながら重要な拠点として人々が活動し続けたことがわかりました。



明治時代の石樋（導水管：全長約20m）

2. 森原下ノ原遺跡の逸品たち（縄文時代～古墳時代）

縄文時代の拠点集落



縄文時代後期の土器

特に縄文時代後期前葉では竪穴建物の可能性がある硬化面と、多くの地床炉が見つっています。また、大量の磨製石斧未成品が出土し、石斧の製作拠点であったことがわかりました。

森原下ノ原遺跡では大きく縄文時代中期前半（約5,200年前）と後期前葉（約4,100年前）の土器がまとまって出土しました。これらの土器は地域の特徴を知るうえで貴重な資料です。



縄文時代後期の
石斧未成品



地床炉



石材の集積

弥生時代前期の石斧製作

縄文時代後期に引き続き、弥生時代前期前半にも磨製石斧が製作されていました。石材は近隣の山地や河原から採取していたと考えられます。

しかし、本遺跡には完成品がなく、近隣の集落へ供給していた可能性が高いです。



弥生時代
前期の
石斧未成品



ミニチュア石剣
(全長8cm)

また、ミニチュア石剣も見つかりました。石剣は墓に納められることが多く、付近に石斧を製作した人々の墓があったのかもしれません。

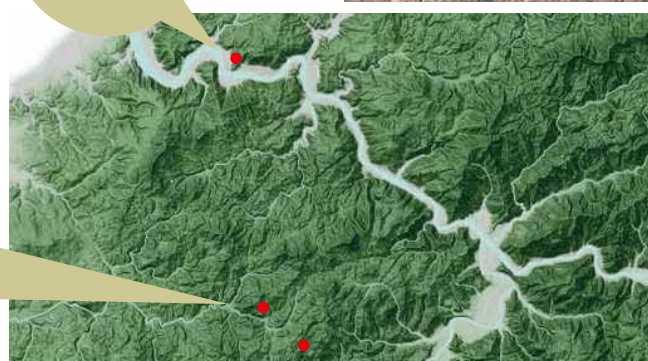


石斧の材料となった岩石の材料の露頭

河原で拾える
石材



森原下ノ原遺跡



川だけ地形地図(平26情使第964号)を使用

古墳時代初頭の移住？

弥生時代後期(約2,000年前)から古墳時代中期(約1,500年前)にかけての集落が見つかり、そのうち古墳時代初頭の竪穴建物からは地元の土器とは異なる土器がまとまって出土し、周防・長門(山口県)方面から移住があった可能性が考えられます。

ミステリアスな古墳時代！



青銅鏡



石釧

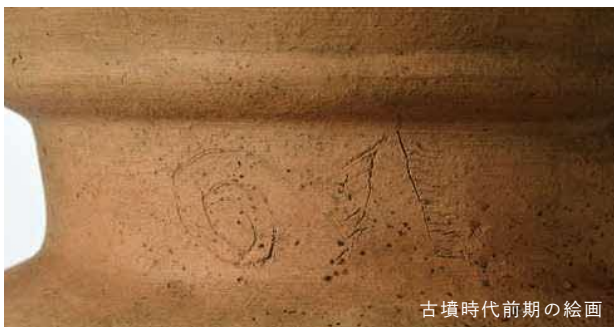
島根県
2例目



周防・長門系土器

古墳時代前期には後漢製の青銅鏡片や石釧と呼ばれる腕輪形石製品、雷や龍を描いたと考えられる絵画土器などが出土しています。遺跡周辺に古墳は見つかっていませんが、有力な人物がいたことを示しています。

また、古墳時代前期末の竪穴建物では、粘土に覆われた合わせ口の土器が見つかり、棺の可能性がありますが、詳しくはわかりません。



古墳時代前期の絵画



合わせ口土器(復元)

江の川に まつわる祭祀？

明確な遺構はありませんでしたが、古墳時代中期を中心とするミニチュア土器や土製勾玉、滑石製模造品などが出土しています。

また、隣接する森原神田川遺跡でも古墳時代後期を中心とする祭祀跡が見つかっており、継続的な祭祀が行われていたと考えられます。



古墳時代後半期の
ミニチュア土器



滑石製模造品と勾玉・菅玉



土製勾玉

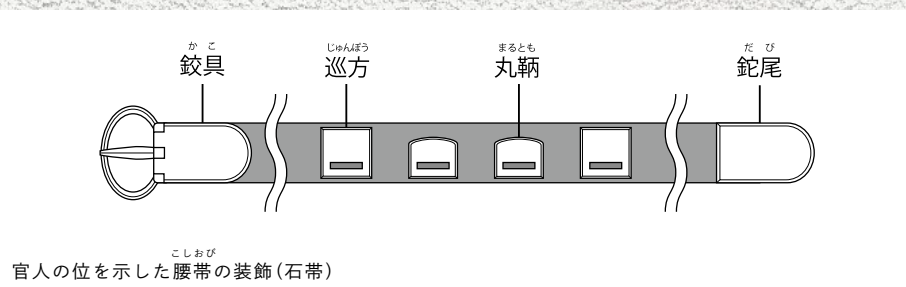
3. どこから来たのか？(奈良・平安時代)



奈良・平安時代の須恵器・土師器

奈良・平安時代の具体的な遺構は見つかっていません。しかし、この時期の須恵器や土師器が多く出土しており、何らかの施設があったことは間違いありません。

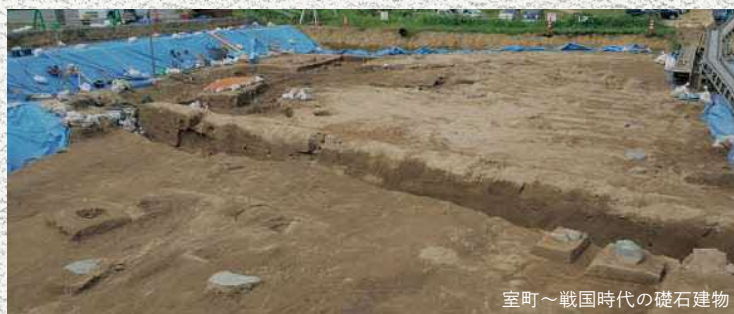
また、遺跡からは北陸地方の特徴を持った煮炊具も出土するなど、遠隔地からの人の動きがあった可能性が考えられます。さらに、官人が帯びるベルトの装飾(石帯)も出土しています。付近に官人が勤めた施設があったのかもしれません。



4. 礎石建物と鉄製品の謎(室町時代)

貴重品を収めた倉庫？

15～16世紀になると礎石建物や複数棟の掘立柱建物が立ち並んでいたと考えられます。建物の周辺からは鉄製の飾り金具や30点以上の甲冑の小札、鉄鍬、約20本の鉄釘の束などが出土しており、格式の高い建物に貴重品が収められていた風景が想像できます。



室町～戦国時代の礎石建物

鉄器製作の拠点か

建物群の周囲では少なくとも7基の鍛冶炉が見つかり、大量の鍛冶滓や100点以上の棒状鉄製品が出土しました。貴重品を収めた倉庫の周囲でどんな鉄器を製作していたのでしょうか。



鍛冶炉



鍛冶炉と鉄滓



建物の飾り金具・鉄鍬・甲冑の小札



鍛冶作業の様子

5. 中世の交易品(室町・戦国時代)

石見の茶の湯文化と貿易陶磁



灰被天目



内面



外面

はいかつぎ

灰被天目とは中国の明代(14世紀～15世紀)に福建省で作られた黒釉の茶碗で、貿易品としても東アジアに広く流通しました。日本では喫茶の受容に伴い、抹茶用の茶碗として禅宗の寺院や足利将軍家などの有力者のあいだで珍重されました。

森原下ノ原遺跡から出土した灰被天目は、明代初頭(14世紀末～15世紀初頭)の製品です。完全な形で見つかる例は極めてまれで、状態の良い完形品で見つかった例は全国で今回の出土例を含めて8例しかなく、県内では初の確認例となります。

大きさ:口径12.1cm、高さ6.4cm

日常使いの痕跡か?!

灰被天目の内面には、茶筌による細かな傷がついていました。この灰被天目を所有した人物が、日常的に茶の湯に親しんだ可能性が考えられます。

中国南部から来た陶磁器の優品

森原下ノ原遺跡では灰被天目以外にも貿易陶磁が出土しています。これらは灰被天目と同じく、室町時代の日明貿易や琉球貿易でもたらされたものです。

また、森原下ノ原遺跡の南西約5kmにある江津の都野津は、奈良時代にさかのぼる港町で、中世(鎌倉～室町・戦国時代)には都野氏が支配する日本海水運の拠点でした。森原下ノ原遺跡は中世江津の水運を考える上でも、重要な遺跡といえます。



青磁碗



白磁碗



輸入陶磁器



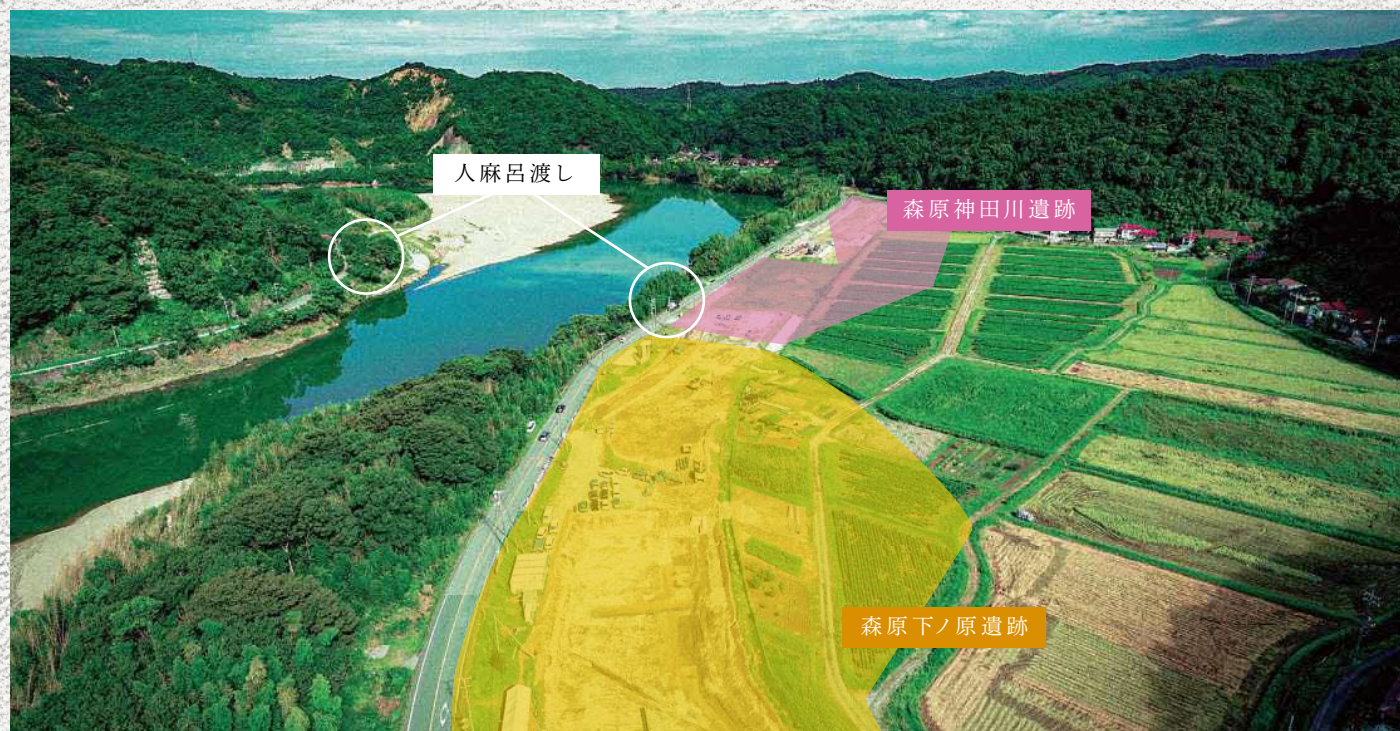
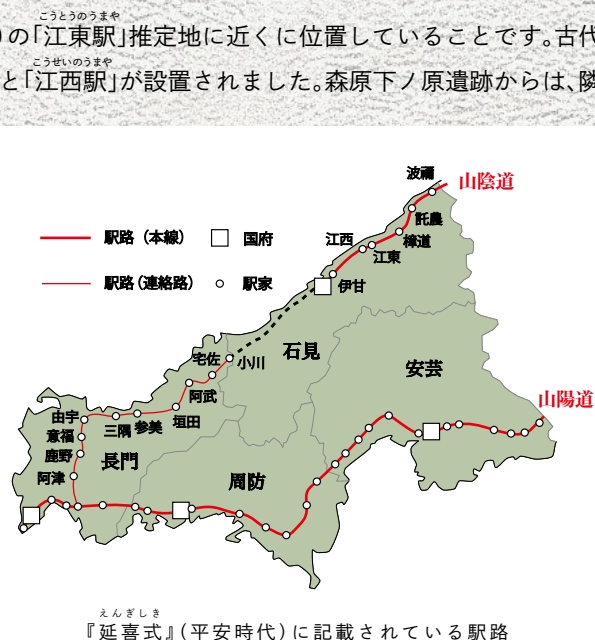
6. まとめ 交通拠点としての森原下ノ原遺跡

江津(江の川河口の左岸一帯)は、江の川の水運と日本海水運の結節点として、少なくとも鎌倉時代前半(13世紀前半)には「津」(港町)として成立していた可能性が文献史学から指摘されています。

森原下ノ原遺跡は、江の川の河口部から約5km上流に位置しており、日本海経由でもたらされた中世の貿易陶磁器をはじめ、江の川上流部(広島県)の特徴をもった弥生土器も出土しています。このことから、日本海や江の川の水運に関わる遺跡であった可能性が考えられます。

さらに注目すべきは、森原下ノ原遺跡が古代山陰道ルート(2説あり)の「江東駅」推定地に近くに位置していることです。古代においては、江の川を渡河する施設として、江の川を挟んだ東西に「江東駅」と「江西駅」が設置されました。森原下ノ原遺跡からは、隣接する森原神田川遺跡と合わせて、古墳時代～奈良・平安時代の遺物がまとまって出土しています。つまり、古墳時代以降、森原下ノ原遺跡とその周辺遺跡は、水上交通に加えて、江の川の渡河点にあたる陸上交通の拠点を形成していた可能性が考えられるのです。

ところで、森原下ノ原遺跡の北200mと対岸の千金地区には、奈良時代に石見国司として赴任した柿本人麻呂が江の川を渡った場所にちなむ「人麻呂渡し」の伝承地が存在しています。偶然とはいえ、森原下ノ原遺跡の性格の一端を暗示するかのようです。なお、江津本町(「江西駅」推定地)を通過する古代山陰道ルート説では、古代の須恵器・土師器が多数出土している長田遺跡が、「江東駅」推定地を考える上で重要な遺跡であると思われます。今後の調査研究が俟たれます。



編集・発行 令和4(2022)年10月
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL(0852)36-8608

E-mail maibun@pref.shimane.lg.jp

URL <https://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>



江の川タロー